



Title	現代標準アラビア語の「受身」構文について
Author(s)	木村, 将史
Citation	アラブ・イスラム研究. 2006, 5, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105872
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代標準アラビア語の「受身」構文について¹⁾

木村 将史*

Some Notes on Passive Sentences in Modern Standard Arabic

Arabic has two voices: active and passive. This paper deals with the latter. There are many literatures about passive sentences which mainly focus on grammatical features, but there are few about the frequency or contexts of their use. The main purpose of this paper is to illustrate some features about passive sentences of Modern Standard Arabic (MSA) and the contexts that influence on their use, by way of classifying and analyzing collected passive verbs from some novels and newspapers.

There are some grammatical features about passive voice in both classical Arabic and MSA. Their grammatical rules and the frequency of passive sentences are more or less related, and I try to prove it from the viewpoint of agent, thematization and the word order of the sentences. The fact that Arabic has a rather free word order of the sentence compared with that of English may influence their frequency.

Many types of passive verbs were collected, and they are classified on the basis of forms, meanings, and sentence styles. Some of these show interesting phenomena which betray our expectation. Wright (1896-98) and Cantarino suggest the contexts for passive voice. As they say, there are certainly verbs, which are often used in passive forms and some contexts and circumstances in which passive verbs tend to appear. Cantarino suggests that the passive voice should be used in order to emphasize the action and its object. Through the analysis in this paper, some suggestions about how passive sentences are used and which context often uses passive verbs are offered.

1. はじめに

アラビア語には、他の多くの言語と同様に能動態と受動態との区別がある。古典文・現代文いずれにしても、アラビア語の受身構文について、文法的特徴を記している文献はあるが、出現頻度や出現状況などに関して、詳しく記述された文献というのは少ないと思われる。本稿の目的は、限定的ではあるが、観察されたデータに基づいて、アラビア語の受身構文が持つ特徴を明らかにしようとするものである。ただ、本稿で言う受身表現とは、動詞の形態として受身形であるものに限定する²⁾。

* 大阪外国語大学大学院 言語社会研究科 博士前期課程 地域言語社会専攻

1) 本稿は2004年1月に提出した卒業論文と、関西アラブ研究会の第14回研究会 (2004年9月25日、於四天王寺国際仏教大学) での研究発表に基づいている。指導いただいた先生方及び発表の際にいただいた有益なコメントに感謝します。

2) 本稿では、受動分詞や、その他受動的な意味を持つ能動形の動詞、動名詞は扱わない。

2. 先行研究

2.1. 受身構文に関する研究

村木 (1991) は、日本語の受身構文で使われる、様々な動詞の意味分類を試みている。具体的には〈表 1〉の4つであり、ここでの X、Y はそれぞれ行為を実際に行う動作主、そして行為を受ける被動作主を表す。

村木 (1991) は、(a) から (d) のそれぞれに対して、その特徴と頻度の違いを述べており、結論として、一般に、動詞の他動性が弱い、つまり動作を受ける対象に対して影響をほとんど及ぼさないような場合には、能動・受動の対立関係も弱まり、受動文にはなりにくく、また同様に、状態性の強い動詞 (「要する」「持つ」など) に関しても、受動文にはなりにくいと指摘している。つまり、受身構文の使用には、対応する自動詞が存在するか否か、そして動詞が持つ他動性の強弱の程度に、大きく関係していると主張している。現代標準アラビア語の受身構文に現れる動詞の意味分類に関しては、第5章で述べる。

〈表 1〉: 村木 (1991) による、日本語受身構文で使われる、様々な動詞の意味分類

- (a) X が Y に働きかけ、Y を変化させるもの (「壊す」「つぶす」「曲げる」など)
- (b) X が Y に働きかけるが、Y の変化に関心なもの (「なぐる」「打つ」「押す」など)
- (c) X の Y に対する態度 (「待つ」「探す」「求める」など)
- (d) X の Y に対する精神的な活動 (「思い出す」「しのぶ」「察す」「感じる」など)

2.2. 古典アラビア語の受身構文

本稿では、文法的な特徴を述べるのが主たる目的ではないので、詳細な説明は省くが、アラビア語の受動態における大きな文法的特徴として挙げられるのは、動作主、つまりある動詞の行為を実際に行う人、あるいはモノを表すことができないということであろう。つまり、英語では「by」、日本語では「～によって」などで表される表現は、アラビア語には現れない。能動態のみに動作主が現れるというこの事実は、アラビア語の受身構文の出現頻度に、多少なりとも影響を及ぼしていると推定される。

さらに、アラビア語の受身構文の使用頻度に関しては、「主題化」という概念と関係があると言える。ここでいう主題化とは、特に強調を置きたい名詞を文頭に持ってくることをいうが、アラビア語では焦点を当てたいものが、能動文の主語であろうと、直接目的語であろうと、*ʾammā-fa* 構文の使用によって、それらを主題化した文章を、能動態のまま作り出すことができる。

(1) *aš-šabābiku ʿalī fataḥa-hā* [Bubenik: 305]. 窓はアリーが (それらを) 開けた。

O S V

(2) The windows were opened by Ali [Bubenik: 307]. 窓はアリーによって開けられた。

英語では、OSV という語順にできないため、目的語などに焦点を当てる場合、(2)

のように、受動態にせざるを得ないという理由から、受動文は比較的多いと考えられる。アラビア語では、(1) のように、主題化のプロセス (ここでは「窓」を主題化) を経る上で特に文法的制約を受けることはなく、能動態のままで表すことができる。したがって、アラビア語では、英語とは異なり、明示的な統語的必要に迫られて受動態を使用することがないために、あくまで理論上ではあるが、受動態を使用することは少ないと言えるのではないか。英語の文章では、主題化したいがために受動化するとも言えるので、主題化と受身構文の関係は強いと言えるが、アラビア語においては、主題化が受動化に強い影響を与えるということはないので、主題化と受身構文の関係は弱いと推測される。つまりアラビア語では、態が主題のシステムによって決定されるわけでは必ずしもない。

それでは、アラビア語ではどのような場合に受身構文を用いるのであろうか。

Wright (vol. I: 50) は〈表2〉の4つを、受身表現が使用される場合として挙げている。

これら4つは、おおまかに言えば、どれも動作主を述べるか述べないかが、受身表現を使用するか否かを決定する要因となっていると解釈できる。それでは動作主への言及のみが受身表現の使用条件になるのであろうか。このことについては第5章以降、具体的な受身形の用法から考察したい。

〈表2〉: Wright (vol. I: 50) が挙げる、受身表現が使用される場合

- ① 神、もしくは何らかの高位の存在が、行為の動作主である場合
- ② 動作主が全く知られていない、もしくは少なくとも確かには知られていない場合
- ③ 話し手、あるいは書き手が動作主の名前を挙げたくない場合
- ④ 聞き手、あるいは読者の関心が動作主よりも、その行為によって影響を受ける被動作主により多く向けられている場合

2.3. 現代標準アラビア語の受身構文

形態的・統語的な面については、現代標準アラビア語の受身表現も、古典文で使われるそれと同じであると言っていいであろうが、受身表現が現れる環境や、その用法においては、古典文と少し異なる部分もある。

まず、動作主の問題についてである。古典アラビア語の受身構文では、動作主を表せないと述べたが、Cantarino は、行為を実際に達成する「モノ」(あるいは道具)としての論理的主語は、受動態でも表現できるということを、前置詞句 (min, li, bi などを使った句) を用いて説明している。しかし同時に、前置詞がどこまで実際の動作主、つまり直接的にその行為を行うものを導いているかを述べるのは、多くの場合難しいとも述べている (Cantarino: 53)。つまり受身構文では、直接的な動作主を述べる場合もあるが、多くの場合、手段を表す間接的な動作主を述べることが多いということであろう。次の例の、(3) は直接的な動作主、(4) は間接的な動作主だと考えられる。

(3) 'anna mā yūḥā 'ilā ṣāḥibi-hī 'innamā yūḥā 'ilay-hi min al-lāhi ḡati-hī [Cantarino:

53]. 彼の仲間に啓示されたものは、神自身によって彼に啓示された。

(4) ja'ala aṣ-ṣabīyu yurā'u li-hādayni aṣ-ṣawtayni [Cantarino: 53]. その少年はこれら二つの声で驚き始めた。

現代標準アラビア語において、受身表現が使用される状況というのは、古典文のそれとほぼ一致するが、そのたいていの目的は、その行為と目的語、すなわちその行為を受ける被動作主に、より大きな強調を置くためだとされている (Cantarino: 52)。現代文では、動作主の問題よりも、行為そのものの意味や、被動作主が受身構文を構成するための重要な要素となっているのである。

さらに、現代標準アラビア語の受身形の特徴として述べるべきことは、純粹に「受身」の意味を表さず、特別な意味を持つ受身形があるということである。すなわち、価値の意味、可能の意味、そして義務の意味³⁾である。以下、順に例を挙げる。

(5) lam yakun laday-nā ṣay'un yuḍkaru [Cantarino: 56]. 述べる価値があるものなんて私達には何もない。

(6) 'inna-hū ṣay'un lā yuṣaddaqu [Cantarino: 56]. それは信じられないことだ。

(7) zāra-nī yawma kuntu wa-al-ḥaqqu yuqālu fī ḥājatīn ṣadīdatīn 'ilā ziyāratī miṭli-hī [Cantarino: 57]. 真実を言うべきであるが、私が彼のような人の訪問をととても必要としていた時に彼は私を訪ねてくれた。

3. 対象テキスト

本稿では、エジプト人作家 نجيب محفوظ Najīb Maḥfūz 著 *بداية ونهاية Bidāyah wa Nihāyah* (1949、以下 Maḥfūz) と、エジプトで発行されている新聞 *الأهرام Al-ʾAhrām* (2003年5月分) を主たる対象テキストとし、さらに、そのほかの文学作品、雑誌、新聞等からも、いくつかの受身構文を抜粋した。

頻度に関して触れておくと、Maḥfūz には7173文あり、そのうち受身表現は399例見られた。これは約18文に1つの割合 (約6%) で受身表現が見られたこととなる。一方、Al-ʾAhrām から抜粋して観察した792文の中には、155例の受身表現が見つかった。これは約5文に1つの割合 (約20%) である。

以下では、対象テキストに見られた受身表現を、語彙の特徴や文体、特に語彙の意味を中心に、受身表現が使用される状況を探り、現代標準アラビア語の受身構文の使用にどのような特徴があるのか示す。

4. 語彙分類

どのような性質を持った動詞が受身形として現れやすいのかを見るため、ここでは、対象テキストに見られた受身形の動詞の形態的特徴について簡単に述べる。

一般に動詞が受身形になるか否かというのは、その動詞が自動詞か他動詞かに拠

3) 義務の意味に関しては、対象としたコーパスでは見つけることができなかった。Cantarino に挙げられている用例も少ないことから、おそらくそれほど多く使われる意味ではないと思われる。

るところが大きい。アラビア語の動詞は、大半が3子音からなる語根で形成されているが、その形態から基本形（第Ⅰ形）と、多くの派生形とに分かれる。本稿では第Ⅹ形までを扱っているが、第Ⅰ形から第Ⅹ形はそれぞれ特徴的な意味を持っており、自動詞の多い派生形もあれば、逆に、他動詞の多い派生形もある。

今回対象としたテキストで観察された受身形の動詞では、他動詞の多い第Ⅰ形（52%）、第Ⅳ形（25%）、第Ⅱ形（10%）が受身になる割合が高く、第Ⅷ形（7%）が次に続く。受身形があまり見られなかった語形は、第Ⅹ形（3%）、第Ⅲ形（2%）、第Ⅴ形（1%）であり、大半が自動詞の第Ⅵ形、全て自動詞の第Ⅶ形、第Ⅸ形の動詞に関しては、全く受身形が見られなかった。今回対象にしたテキストで、観察された受身形の動詞は本稿末の〈別表1〉を参照していただきたい。

5. 意味による分類

コーパス内で観察された動詞の受身形から、比較的多く見られ、使用されやすいと思われるものを、意味の上からグループに分けると、〈表4〉の6つが挙げられる。これら以外の動詞の受身形については、用例数がきわめて限定的であるため分類もできず、論じるゆとりもないので割愛せざるを得ない。

以下、これらのグループについて、どのような動詞が、どのような形で使用されているか、事例に即して考察する。

〈表3〉: コーパス内
受身動詞に各動詞
が占める率

第Ⅰ形	52%
第Ⅱ形	10%
第Ⅲ形	2%
第Ⅳ形	25%
第Ⅴ形	1%
第Ⅵ形	0%
第Ⅶ形	0%
第Ⅷ形	7%
第Ⅸ形	0%
第Ⅹ形	3%

〈表4〉: コーパス内動詞受身
形の意味による分類

1. 被動作主に否定的な印象を与える動詞
2. 移動・伝達に関する動詞
3. 呼称・評価に関する動詞
4. 神が動作主である動詞
5. 生死に関する動詞
6. 感情・精神状態に関する動詞

5.1. 被動作主に否定的な印象を与える動詞⁴⁾

受身形で使われる動詞の使用頻度としては、このグループのものが最も高いと思われる。それらには、害を加える、もしくは感じさせる動詞（「殺す」「傷つける」「苦しめる」など）や、犯罪に関するような動詞（「盗む」「刑務所に入れる」「逮捕する」など）、その他、文脈にもよるが、否定的な意味を持つ動詞（「追い出す」「否定

4) このグループに属する動詞を以下に挙げる。jaraḥa「傷つける」、xadaša「傷つける」、xada'a「だます」、ḡaraba「殴る」、qatala「殺す」、qaḍā「消滅させる」、ʿaḡḡaba「苦しめる」、ʿaṣāba「傷つける」、ibtalā「苦しめる」、istašhada「(受身形で) 殉教する」、ʿasara「捕虜にする」、janā「(罪を) 犯す」、ḡarama「奪う」、sajana「投獄する」、saraqa「盗む」、ḡabaṭa「逮捕する」、qabaḡa「捕まえる」、ʿāqaba「罰する」、irtakaba「(罪を) 犯す」、iṭṭaḡala「逮捕する」、ittahama「嫌疑をかける」、taraka「捨てる」、ṣada'a「砕く」、ṭarada「追い出す」、faraḡa「課す」、mana'a「妨げる」、ʿajbara「強いる」、ʿaḡdama「破壊する」、ʿalgā「破棄する」、ʿankara「否定する」、iḡṭarra「強いる」

する」「強要する」など) も含まれる。これらは、動作主よりも、被動作主に対して、より大きな強調を置くのが一般的なようである。

- (8) wa-qutilat fī 'aṭnā'i 'awdati-hā 'ilā baġdāda. [Al-ʿAhrām 2003/5/10]. バグダードへ帰る途中に彼女は殺された。
- (9) la-qad qubiḍa 'alā ba'ḍi šurakā'i-hi. [Maḥfūz: 309]. 彼の仲間の何人かは逮捕されてしまった。
- (10) 'uḍṭurirtu 'ilā istid'ā'i ṭabībīn wa-širā'i 'adwiyatin. [Maḥfūz: 217]. 医者を呼んで、薬を買わざるをえなかったのだ。

5.2. 移動・伝達に関する動詞⁵⁾

このグループは2つに分けているが、1つは、文字通り移動を表す、モノの移動に関する動詞(「運ぶ」「送る」など)と、もう1つは、言葉の移動、つまり伝達に関する動詞(「言う」「発表する」「放送する」など)である。これらの動詞が受身形として現れやすいのは、おそらく発話者の意識の中で、「運ぶ」動作主よりも、「運ばれる」被動作主の方が重要で伝えたい事柄だからであろう。以下にそれらの例を挙げる。

- (11) 'umilat al-mir'ātu fī waḍ'īn mā'ilin. [Maḥfūz: 49]. 鏡は傾けられた状態で運ばれた。
- (12) qīla la-nā 'inna-hū māta faj'atan. [Maḥfūz: 33]. 私たちは突然彼(父)が死んだと言われたんだ。

5.3. 呼称・評価に関する動詞⁶⁾

それほど多くの種類が見られたわけではないが、「呼ぶ」という意味や、「考える」「みなす」などの意味を持つ動詞の受身形も、受身表現がよく見られるグループとして扱うと思われる。これらの動詞は、動作主が誰か特定の人間を示しているということが少なく、不特定多数の人間であることが多い。わざわざ「周りの人間」や「一般の人々」を主語にした能動文よりは、被動作主を主語にした受動文のほうが多いであろう。

- (13) hal la-ka 'uxtun tuḍ'ā nafīsa? [Maḥfūz: 364]. 君にはナフィーサという姉がいるか?
- (14) 'illā 'anna-hā kānat tu'addu 'ajmala imra'atin fī al-'imārati [Maḥfūz: 51]. しかし、彼女はその建物で最も綺麗な女性だと考えられていた。

5) このグループに属する動詞を以下に挙げる。ba'āta「送る」、ḥamala「運ぶ」、naqala「送る」、'arsala「送る」、ḥakā「話す」、rawā「語る」、qadafa「投げる」、qāla「言う」、'ablaġa「伝える」、'adā'a「放送する」、'a'lana「発表する」、'alqā「投げる」

6) このグループに属する動詞を以下に挙げる。da'ā「呼ぶ」、sammā「名付ける」、'aṭlaqa「名付ける」、ḥasiba「みなす」、'adda「みなす」、qaddara「評価する」、i'tabara「みなす」

5.4. 神が動作主である動詞⁷⁾

2.2でも述べたが、受身表現が現れる環境の1つに、「神、もしくはなんらかの高位の存在が行為の発動者である場合」(Wright I: 50)とあるように、対象テキストには、神が動作主と考えられる動詞の受身形がいくつか見られた。これらも受身表現が現れる特徴だと考えられる。以下がその例である。

(15) *hal qudira la-hā 'an tamḍiya al-baqīyata min ḥayāti-hā waḥīdatan?* [Maḥfūz: 253]. 人生の残りを1人きりで生きることが彼女の運命なのだろうか?

(16) *wa-law 'utīḥa li-al-'abi 'an ya'ūda 'ilā al-ḥayāti* [Maḥfūz: 173]. もし父に生き返る権利が与えられたとしたら

5.5. 生死に関する動詞⁸⁾

受身形を取る動詞で、生死に関する意味を含むものは少なくない。これは、前節で示した「神が動作主である動詞」の部分とも関係するが、生死に関する動詞に受身表現が多く使われるということは、動作主が神であるという意識が、意識的に、もしくは無意識的に言語に反映された結果だと推定される。以下に例を挙げる。

(17) *li-māḍā lam 'uxlaq ka-'ixwat-ī aq-ḡukūri?* [Maḥfūz: 70]. どうして私は男の兄弟として生まれてこなかったのだろうか?

(18) *'inna jundīyan 'amrīkīyan qutla bi-raṣāši qannāšin fī baḡdāda 'amsi* [Al-ʿAhrām 2003/5/10]. 昨日、バグダードでアメリカ人兵士1名が狙撃手による銃弾によって死亡した。

5.6. 感情・精神状態に関する動詞⁹⁾

この感情・精神状態に関する動詞は、「気が狂う」や「青ざめる」などで、観察数は少ないが、この種の動詞もよく受身形として用いられるようである。

(19) *wa-kāda yujannu min al-faraḥi* [Maḥfūz: 251]. 彼は喜びでおかしくなりそうだった。

(20) *wa-umtuqī'a aš-šābbu* [Maḥfūz: 326]. その青年は青ざめた。

これらの動詞は、いずれも能動態として、「(そういう状態) にさせる」という意味は持っておらず、受身形にして初めてこのような意味が現れるのであるが、なぜ能動態で「(そういう状態) になる」と表せないのであろうか。おそらく上で挙げた

7) このグループに属する動詞を以下に挙げる (wahaba, 'atāḥa は文脈による)。xalaqa 「創造する」, tawaffā 「(受身形で) 死ぬ」, qadara 「運命付ける」, waffaqa 「成功を与える」, wahaba 「与える」, 'atāḥa 「与える」

8) このグループに属する動詞を以下に挙げる。xalaqa 「創造する」, walada 「生む」, dafana 「埋める」, qatala 「殺す」, šayya'a 「告別する」, kaffana 「経帷子で覆う」, wārā 「埋める」, tawaffā 「(受身形で) 死ぬ」, iḥṭadara 「(受身形で) 死ぬ」, istaṣhada 「(受身形で) 殉教する」

9) このグループに属する動詞を以下に挙げる。janna 「(受身形で) 気が狂う」, 'agmā 「(受身形で) 気絶する」, imtaqa'a 「(受身形で) 青ざめる」

「おかしくなる」や、「気絶する」などは、自分でその状態になろうと思ってもなれるものではなく、何らかの原因があって、しかもそれは自分の意志ではないということからだと推測される。これも、おそらく動作主が神という意識が働いていると考えられる。

6. 慣用的な受身表現

アラビア語の動詞の中には、慣用的に受身形が使用されるものもある。それらは、能動形の動詞の意味を、純粋に受身にした意味とは異なる。以下に、3つの動詞を挙げる。

6.1. 'arā

まず、「見る」という意味の動詞、ra'ā の派生形第 IV 形、「A に B を見せる」という意味になる 'arā の未完了形二人称単数の形、turā である。この turā については、受身として、「あなたが何かを見せられる」という意味で使われているものは見当たらず、疑問文と共に使われ、「~だろうか」という意味を持つ。

- (21) 'a-turā-hā tarā-nī al-'āna min 'ālamī-hā al-'āxari? [Maḥfūz: 380]. 今、彼女は別の世界から私を見ているのだろうか?

6.2. wajada

次に述べるのは「見出す」という意味の動詞、wajada の受身形についてである。この動詞は受身形にすると「見出される」という意味になるのであるが、一般に「ある、いる、存在する」という意味で用いられていることの方が多い。

- (22) 'ayna yūjadu hādā al-'amalu? [Maḥfūz: 38]. どこにそんな仕事が存在するんだ?

6.3. xayyala

派生形第 II 形「信じさせる」という意味を持つ、xayyala の受身形 xuyyila は、前置詞 'ilā と名詞節を構成する 'anna と共に使われ、「~のようだ」という意味を表す。

- (23) xuyyila 'ilay-hi 'anna al-'azmata qad marrat bi-salāmin [Maḥfūz: 218]. 危機は無事に去ったようであった。

7. 文体と受身表現

受身構文の使用には、語彙の意味だけではなく、文体も大きく影響を及ぼしていると思われる。ここでは、文体と受身表現の関係について見ていく。

7.1. 状況説明文

家や部屋、あるいは店の中など、周りの環境の様子、背景等を描写する際、比較

的多く受身構文が見られた。次の例がそうである。

- (24) nuḍidat al-mawā'idu wa-al-karāsī 'alā al-jānibayni [Maḥfūz: 154]. 机と椅子が
両側に積まれていた。
(25) wa-'alā xuwānin fī ruknin min aš-šurfati wuḍi'at šīniyatun šuffat bi-hā qullatāni
[Maḥfūz: 209]. バルコニーの端のテーブルには、水差しが2つ乗ったトレイ
が置かれていた。

どれも動作を表す動詞が使われているが、これらの文が述べられるその瞬間に、その動作が行われたとは文脈上考えにくい。このように受身表現は、「状況説明」をする際によく使われると考えられる。

7.2. 人物、事物の紹介文、説明文

百科事典などのテキストに多いと思われるが、ある人物や、事物を紹介、説明する際には、一つのものに対しての説明が続くため、そのもの自身が主語になりやすく、受身の形式が使われやすいと思われる。

- (26) 'imra'atun 'urifat bi-sumrati-hā al-'amīqati wa-ša'ri-hā al-ja'di wa-jismi-hā al-muktanizi
[Maḥfūz: 161]. 色黒で、巻き毛の髪、そしてよい体つきで知られる女性
(27) 'alā kanabatayni yusta'malāni nahāran li-al-julūsi wa-laylan li-an-nawmi [Maḥfūz:
173]. 昼は座るのに、夜は寝るのに使われる二つのソファで

7.3. 料理の手順を説明する文

これも慣用的なものだと考えられるが、料理の手順を説明する文も、命令文や平叙文ではなく、受身表現が用いられるのが一般的である。

- (28) yūda'u al-laḥmu fī al-birāmi ... tumma yuḡaṭṭā bi-al-baṭāṭisi wa-al-baṣali ... wa-tuḡhammaru jamī'u-hā fī as-samni [Abboud 1971:1:8]. 鍋に肉を入れて、それからじゃがいもとたまねぎで包んで、それら全てをラードで炒めて…

7.4. 名詞節をつくる mā と共に使われる受身表現

ここで述べる mā は、「～なもの」「～なこと」という関係詞としての働きを持つものであり、mā と共に使われる受身表現は、大半が未完了形で、さらに mā 自体を主語にしている。ただ「～なもの、こと」として意味を持つものも多いが、程度を表す表現になることもある。以下がその例である。

- (29) wajada-hā jamīlatan fawqa mā yuštahā [Maḥfūz: 264]. 彼は彼女がこの上なく美しいということが分かった。
(30) rāna 'alay-hi futūrun ṭaqīlun 'aktara min-mā yuḡtamalu [Maḥfūz: 299]. 耐えられないほどの重苦しい憂鬱が彼にのしかかった。

(29) は、「望まれるものより上」という意味、(30) は「耐えられるものより多く」という表現になっている。

7.5. *la* と共に使われる受身表現

受身形が持つ可能の意味と、否定辞 *la* とが連結して使われている受身表現の例が多く観察された。これらは、多くが関係節で現れ、不定の先行詞を主語にした形で、その先行詞自体を修飾する。この用法の多くは、先行詞である名詞の説明として使われているのだが、大部分がそれらを強調するために使われていると思われる。

(31) *hāḍihi mīzātun lā yustahānu bi-hā* [Maḥfūz: 233]. これらが見逃せない利益だ。

(32) *wa-ja'ala ḥanīnu-hū 'ilā 'ahli-hī qūwatan lā tuqāwamu* [Maḥfūz: 213]. 家族に対する郷愁は抵抗できないほどの力となった。

8. 分析とまとめ

ここまで、意味的・文体的な面を中心に受身形の動詞と、受身構文の特徴とを探ってきたわけであるが、第5章で扱った動詞の意味分類からもわかるように、受身形になりやすい動詞は、能動態で使用すれば、動作主である主語よりも、被動作主である目的語に焦点が当てられる場合が多い動詞が大半である。現代標準アラビア語で受身表現が用いられるたいていの目的は、その行為と被動作主により大きな強調を置くためだとされている (Cantarino: 52)。したがって、本研究はこの説明を具体的に強く裏付けるものになったのではないか。さらに、何らかの原因はあるが、自分の意志とは無関係な行為を表現する際にも、比較的受身構文になりやすいことから、行為が自分の意志によるものか否かということも、受身構文の使用と強く関係があることが判明した。また、第7章で述べたように、文体的な影響も大きいと考えられる。特に 7.5. の用法は多く観察された。

ここまで述べてきた受身構文の特徴から、アラビア語の受身構文が、どのような場合に、どのような形で使用されるのか、そして、どのような意味の動詞が多く現れるのかなどについて、従来よりは詳細に論じることができたと考える。しかし、ここで扱った受身構文は、アラビア語の「受身」という概念の、ほんの一部分に触れたにすぎない。今後、さらに多くのアラビア語のテキストから、受身表現のデータを収集し、今回扱わなかった受動分詞や、その他受動的な意味を持つ動名詞、受身の意味を持つ派生形の動詞などに関しても調べる必要があると考えている。

[転写方式]

(ى و ه ن م ل ك ق ف غ ع ظ ط ض ص ش س ز ر ذ د خ ح ج ث ت ب ء)
(' b t t j ḥ x d d r z s š ṣ ḍ ṭ z ' ġ f q k l m n h w y)

〈別表1〉語形別頻度分類表 (総計812例) ※ () 内の数値はテキスト中に現れた数

第 I 形 فَعَلَ فَعِلَ [فُعِلَ] (421)	(12) وَلَدَ, (12) عَقَدَ, (13) ذَكَرَ, (14) عَرَفَ, (16) فَتَحَ, (18) سَرَّ, (26) قَالَ, (27) عَدَّ, (46) وَجَدَ, (6) وَضَعَ, (6) نَقَلَ, (6) جَنَّ, (7) قَتَلَ, (7) حَكَى, (8) عَنَى, (9) بَاعَ, (10) قَضَى, (11) دَعَا, (4) عَرَضَ, (4) صَفَّ, (4) بَنَى, (5) مَنَعَ, (5) شَعَلَ, (5) سَمِعَ, (5) خَلَقَ, (5) حَمَلَ, (5) أَخَذَ, (3) عَهَدَ, (3) طَلَبَ, (3) ضَبَطَ, (3) صَرَفَ, (3) سَاقَ, (3) سَرَقَ, (3) رَوَى, (3) رَامَ, (4) نَشَرَ, (2) دَرَسَ, (2) خَدَعَ, (2) جَنَى, (2) جَمَعَ, (2) بَدَّلَ, (3) وَصَفَ, (3) نَسِيَ, (3) كَتَبَ, (3) قَرَأَ, (2) غَنَى, (2) طَاقَ, (2) طَرَدَ, (2) ضَرَبَ, (2) سَمَحَ, (2) سَدَّ, (2) سَجَنَ, (2) سَأَلَ, (2) رَدَّ, (2) دَفَنَ, حَفَرَ, حَسَدَ, حَسَبَ, حَرَمَ, حَدَّ, حَتَمَ, جَرَحَ, جَذَبَ, تَرَكَ, بَعَثَ, أَسَرَ, (2) نَفَعَ, (2) قَدَّرَ, سَطَّرَ, سَدَّ, سَبَقَ, زَارَ, زَرَعَ, رَصَّ, رَجِمَ, رَثَى, رَأَى, ذَرَى, دَفَعَ, خَفَضَ, خَصِمَ, خَدَشَ, قَبَضَ, فَلَكَ, فَعَلَ, فَرَضَ, فَرَشَ, غَلَبَ, عَلِمَ, عَزَفَ, صَارَ, صَدَعَ, شَفَى, شَعَرَ, شَدَّ, وَهَبَ, وَزَنَ, نَفَشَ, نَضَدَ, نَثَرَ, مَنَعَ, مَحَا, لَمَسَ, لَفَّ, كَالَ, قَطَعَ, قَذَفَ, قَبِلَ	
第 II 形 فَعِّلَ (79)	(2) عَوَّضَ, (2) حَمَّرَ, (3) شَيَّنَ, (4) حَدَّدَ, (5) قَدَّمَ, (5) عَيَّنَ, (6) قَدَّرَ, (6) سَمَّى, (19) خَيَّلَ, فَضَّى, عَنَى, عَذَّبَ, شَيَّعَ, سَوَّرَ, زَوَّرَ, حَيَّا, بَيَّنَّ, أَكَّدَ, أَسَّسَ, أُنْثَ, (2) وَزَّعَ, (2) غَطَّى, وَقَّعَ, وَفَّقَ, وَطَّفَ, وَجَّهَ, هَيَّا, نَمَّى, مَيَّزَ, كَوَّمَ, كَلَّلَ, كَفَّنَ, قَيَّدَ	
第 III 形 فَاعَلَ (17)	قَارَنَ, ضَاعَفَ, دَانَى, (2) نَاقَشَ, (2) عَاقَبَ, (3) فَاجَأَ, (4) قَاوَمَ, وَارَى, نَادَى, لَاحَظَ	
第 IV 形 أَفْعَلَ (201)	(5) أَعْجَبَ, (5) أَجْرَى, (8) أَصَافَ, (8) أُنَاحَ, (9) أَعْلَنَ, (17) أَصَابَ, (32) أَفَامَ, (60) أَرَى, (2) أَعْطَى, (2) أَطْفَأَ, (2) أَضَاءَ, (2) أَسَدَلَ, (2) أَرْسَلَ, (2) أَدْخَلَ, (3) أَطْلَقَ, (4) أَذَاغَ, (5) أَنْشَأَ, أَرَشَدَ, أَخْرَجَ, أَحْرَقَ, أَخْبَرَ, أُنْلَجَ, أُنْبَغَ, (2) آتَى, (2) أَلْفَى, (2) أَلْعَى, (2) أَعْلَقَ, (2) أَعَادَ, أَنْزَلَ, أَنْتَجَ, أَنْبَتَ, أَمْسَكَ, أَلْعَى, أَلْحَقَ, أَعْمَى, أَعْدَمَ, أَصْدَرَ, أَشْعَلَ, أَشْرَبَ, أَرَادَ, أَهْدَى, أَنْكَرَ, أَنْقَصَ, أَنْقَذَ, أَنْسَى	
第 V 形 تَفَعَّلَ (12)	(2) تَوَقَّعَ, (10) تَوَفَّى	
第 VI 形 تَفَاعَلَ (0)		
第 VII 形 إِنْفَعَلَ (0)		
第 VIII 形 إِفْعَلَ (60)	(2) إِخْتِاجَ, (2) إِبْتَلَى, (3) إِعْتَقَدَ, (4) إِنْتَظَرَ, (4) إِحْتَمَلَ, (4) إِتَّخَذَ, (12) إِعْتَبَرَ, (12) إِضْطَرَّ, إِشْتَهَى, إِرْتَكَبَ, إِحْتَضَرَ, (2) إِثْمَمَ, (2) إِمْتَنَعَ, (2) إِكْتَشَفَ, (2) إِعْتَقَلَ, (2) إِخْتَارَ, إِثْمَمَ, إِنْتَخَبَ, إِفْتَتَحَ, إِعْتَفَرَ	
第 IX 形 إِفْعَلَّ (0)		
第 X 形 إِسْتَفْعَلَ (22)	(2) إِسْتَعْنَى, (3) إِسْتَهَانَ, (3) إِسْتَشْهَدَ, (5) إِسْتَخْدَمَ, (6) إِسْتَعْمَلَ, إِسْتَنْفَذَ, إِسْتَنْزَفَ, إِسْتَدَلَّ	

[参考文献]

- Peter F. Abboud, Ernest N. McCarus (1983) *Elementary Modern Standard Arabic*, Cambridge University Press.
Peter Abboud et al. (1971) *Intermediate Modern Standard Arabic*, Ann Arbor, Michigan, The University of Michigan.
Vicente Cantarino (1974) *Syntax of Modern Arabic Prose: The Simple Sentence*, Bloomington, Indiana University Press.
Vit Bubenik (1979) "Thematization and Passivization in Arabic", *Lingua* 49, 295-313.
William Wright, W. (1896-1898) *A Grammar of the Arabic Language, vol. I and II*, Cambridge University Press.

- 村木新次郎 (1991) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』(仁田義雄編) くろしお出版, 1-30.
岡崎英樹 (1991) 「コーランにおけるアラビア語の受動態について」『Nebulae』vol. 15, OSAKA GAIDAI LINGUISTIC CIRCLE, 37-88.

[対照テキスト]

- الفحالة, مكتبة مصر, بداية ونهاية (1949) نجيب محفوظ.
Al-Ahrām 2003年 5/5, 5/6, 5/7, 5/10, 5/11, 5/12, 5/13, 5/15.